

グローバルCOE

心の社会性に関する教育研究拠点

The Center for the Sociality of Mind

Newsletter

8

November 15, 2010

北海道大学大学院文学研究科・教育学研究院・経済学研究科
カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センター

CONTENTS

P 2 GCOEスピーカー

P 3 シリーズ

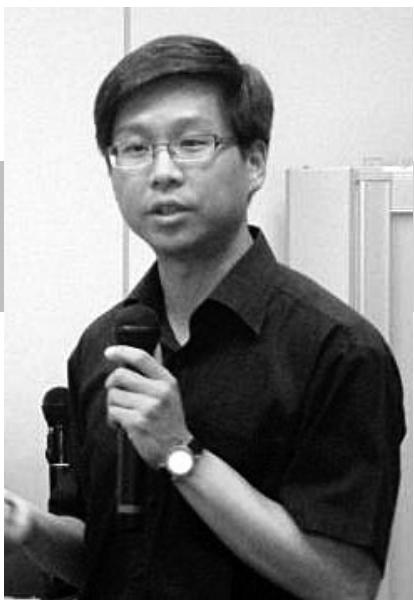
P 4 第20回
国際ワークショップ「学習障害のある子ども
の学習援助」講演会P 5 第10回
発達ディスレクシア研究会日本社会心理学会
2010年度大会
ワークショップP 6 第14回
実験社会科学
カンファレンス・パネル
ディスカッション実験社会科学
サマースクール2010

当 GCOE では、年に数回、第一線で活躍する海外研究者をゲストスピーカーとして招聘してスピーカーシリーズを開催しています。第5回は、昨年10月の玉川大学・北海道大学合同シンポジウムに続き、「心の社会性」を支える神経科学的基盤の探究に向けた共同教育研究体制づくりの一環として、玉川大学の共同研究拠点である California Institute of Technology の元研究員の Hackjin Kim 博士（現：Korea University）に最新の研究成果を紹介していただきました。そして第6回は、ヒトの心の社会性の起源とも言える靈長類の社会行動の研究において著名な Sarah Brosnan 博士（Georgia State University）を招聘し、独創的な実験研究の数々について講演していただきました。

本号ではこの他に、連携研究拠点である特定領域研究：「実験社会科学－実験が切り開く21世紀の社会科学－」において行われた2010年度実験社会科学カンファレンスとサマースクール、国内外の研究者を中心に開催されたワークショップ、講演会、研究会の内容をご紹介します。



GCOEスピーカーシリーズ

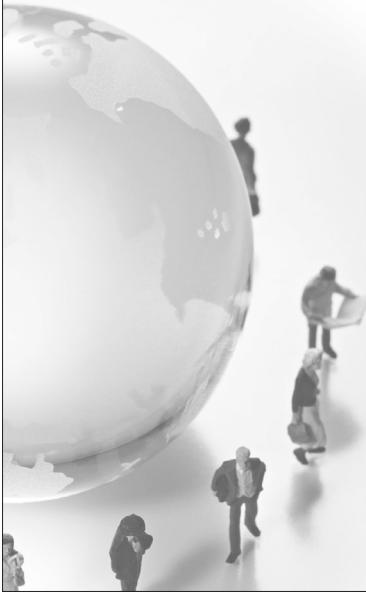


第5回

●日時: 2010年8月3日(火)14:30~16:30
●場所: 北海道大学人文社会科学総合教育研究棟 W409

Neural Processes Underlying Social Decisions on Faces

Reading emotional states from others' faces and evaluating people in terms of preference are probably two most fundamental social decisions we make almost every day. Numerous studies from various disciplines indicate that our daily decisions in social settings are influenced by facial impressions of others. Despite the prevalence and potentially harmful consequences of first impression bias, however, the exact neural mechanisms underlying this behavior still remain unclear. In the first half of my talk, I will briefly review my previous studies on the neural circuitries involved in recognizing emotionally ambiguous face stimuli such as surprised faces and in forming first impressions during face preference decisions. I'll suggest that the subcortical structures such as the amygdala and the nucleus accumbens and the cortical brain structures including the prefrontal cortices play functionally distinctive roles in processing faces, and display significant interactions with each other during social decisions on faces. The second half of my talk will introduce a recent fMRI study from our lab using ultimatum game, in which we investigated the neural mechanisms whereby facial impressions influence social decisions in humans. A pivotal role of the lateral orbitofrontal cortex in integrating information about facial trustworthiness and creating signals biasing decisions during social interactions will be emphasized.



グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」(CSM)では、年に数回、心の社会性にかかる諸領域において研究活動を行っている海外の研究者をゲストスピーカーとして招聘し、講演していただいています。



第6回

- 日時: 2010年9月10日(金) 14:30~16:30
- 場所: 北海道大学人文社会科学総合教育研究棟 W103

The Primate Roots of Prosocial Behavior

Sarah F. Brosnan

(Department of Psychology & Neuroscience Institute,
Georgia State University)

Humans commonly show behaviors which help others, ranging from relatively cost-free actions, such as letting someone in to traffic, to those which require far more investment, such as donating to charity. Thus an interesting evolutionary question is the degree to which the other primates share these behaviors, and if so, to consider possible functions for prosocial behavior. Although observational data indicates the presence of both low- and high-cost helping behavior in the wild, there has been little experimental evidence until recently. A series of studies over the past several years have investigated whether primates are willing to bring food to members of their social group at minimal cost to themselves (e.g. low-cost helping), and found mixed results. Chimpanzees, who shared a common ancestor with humans only 6 million years ago, fail to behave prosocially in these tests, even in situations which seem to encourage such behavior, such as in reciprocal situations. On the other hand, they do help each other when no foods are involved, and clearly recognize the discrepancy between themselves and others, both when they have more than a partner and when they have less. But this does not indicate that humans are alone in our prosocial tendency; capuchin monkeys and callitrichids do behave prosocially in these situations, providing evidence for which selective pressures which may have led to such behavior in both these primates and humans. Among capuchins, too, prosocial preferences interact with another related social preference, that for equity. We find that inequity does not eliminate prosocial behavior as long as the inequity is not too extreme, indicating that prosocial preferences are robust in these monkeys. However, if too extreme, inequity eliminates prosocial behavior, as well as the ability to successfully cooperate to obtain mutual rewards, indicating that these two social preferences are integrally tied to successful cooperation. Thus, one of the functions of prosocial behavior appears to be to support cooperation, as the partners must take each others' needs into account, even if they are dominant, to maintain the benefits from working together.



第20回 国際ワークショップ

University of California IrvineのYen-Sheng Chian先生を迎え、第20回国際ワークショップが開催されました。(共催／北海道大学社会科学実験研究センター)



**Yen-Sheng
Chiang**

(Department of Sociology,
University of California,
Irvine)

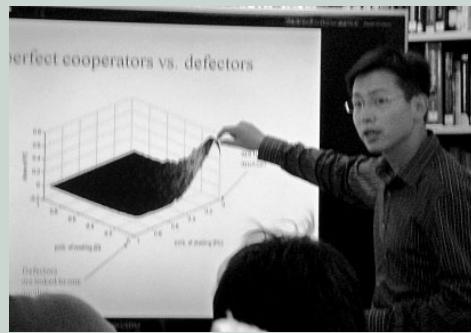
Group homophily and the emergence of upstream reciprocity

互酬性は、資源を与えた者にお返しをすることと定義される。上方互酬性 (upstream reciprocity)はこの定義を拡張し、もともと資源を与えた者とは違う人に「お返し」をする社会システムである。このような現象は日常的にはよくみられるが、こうした社会システムがどのように進化したのかについては解き明かされていない。Nowak & Roth(2007)の先行研究を発展させ、著者はどのようにネットワーク構造が上方互酬性の進化に影響を与えるのかを検討する進化モデルを構築した。具体的には、ネットワークの tie(結びつき) の程度を操作することによって、集団内のタイと集団間のタイの頻度分布の影響力を検討した。このモデル研究の結果から、集団の同質性と異質性、そして協力行動の進化ダイナミクスとの関係について考察した。

日時 2010年8月24日 (火)

10:00～12:00

場所 北海道大学大学院
文学研究科E204



「学習障害のある子どもの学習援助」講演会

主催／教育学研究院
(特殊教育・臨床心理学研究グループ)
共催／当GCOE

日時 2010年8月26日 (木)

18:30～20:00

場所 北海道大学人文社会科学
総合教育研究棟 W203



正高信男

(京都大学靈長類研究所 教授)

現在、学習障害、注意欠陥／多動性障害、高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、約6%の割合で通常の学級に在籍している（文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全国実態調査」より）。これは標準的な30人学級では1～2人の学習困難児が在籍することを示唆する。本講演では、このような現状に対処する上で、e-ラーニングを通じて各家庭とエキスパートを連結する新たな学習プログラムについて、事例を中心に紹介された。

これらの講演会の内容については、
<http://lynx.let.hokudai.ac.jp/CSM/workshops/04.html>をご参照ください。

第10回 発達ディスレクシア研究会

主催／発達性ディスレクシア研究会 共催／当GCOE 後援／北海道教育委員会・札幌市教育委員会、及び北海道大学教育学研究院



日時 2010年7月3日(土)・4日(日)
場所 北海道大学学術交流会館

日本発達性ディスレクシア研究会の主催する公開講演会が、グローバルCOEとの共催で開催された。2つの教育講演と3つの特別講演があり、特別講演は、ディスレクシア研究で世界的に著名な英国ブルネル大学ワイデル・タエコ教授、英国ヨーク大学マーガレット・スノーリング教授、同じくヨーク大学チャールズ・ヒューム教授を迎えて行われた。ディスレクシア研究の欧米と日本の研究動向、英国での調査に基いたディスレクシアと言語困難との関連性の分析、その成果に基づく介入研究などの興味深いお話を伺うことができた。

また同時に開催された第10回発達性ディスレクシア研究会の発表においても、3名の先生から最近のディスレクシア研究について有益なコメントをいただくことができた。

日本社会心理学会2010年度大会ワークショップ

主催／日本社会心理学会
共催／当GCOE



「社会行動と内分泌系」

日時 2010年9月18日(月) 11:00～12:30
場所 広島大学大学院教育学研究科K棟
K203教室

スピーカー **坂口菊恵**(東京大学教養学部) **高橋泰城**(北海道大学文学研究科)

清成透子(青山学院大学社会情報学部)

企画・司会 **犬飼佳吾**(北海道大学経済学研究科) **品田瑞穂**(北海道大学社会科学実験研究センター)

指定討論者 **高橋英彦**(京都大学大学医学研究科) **龜田達也**(北海道大学文学研究科)



近年、人々の社会性に関する進化的・生物学的基盤の解明を目指す研究が社会心理学とその諸周辺領域において高い関心を集め、数々の新たな研究が展開されている。とりわけ人間・社会科学における神経科学の導入の動きは、昨年度の本大会で脳神経科学と社会心理学とのコラボレーションの可能性が企画シンポジウムとして議論されたように、社会心理学にもその影響を及ぼしつつある。このような潮流の中で、人間の神経内分泌メカニズムと、心理・社会行動との関係を解き明かそうとする研究も注目を集めており、協力行動や攻撃行動、性行動、リスクの下での意思決定など多様な領域にわたる社会行動が研究対象として扱われている。しかし、心理・行動神経内分泌メカニズムそれ自体が未知の部分が多い領域であることから、知見間の整合性や測定の正確性、複雑な人間の社会行動への適用の是非についてはしばしば疑問が提起される。このような背景から、本ワークショップでは、神経内分泌と人間の社会行動の関係について3人の若手研究者が研究報告を行った。また社会心理学と神経科学を専門とする指定討論者が、2つの領域間の共同研究の道筋について提案を行った。

第14回

実験社会科学カンファレンス・パネルディスカッション

共催／文部科学省特定領域研究「実験社会科学」、日本学術会議「心理学と社会科学分科会」、当GCOE



「実験社会科学の未来」

スピーカー 西條辰義（大阪大学社会経済研究所）

山岸俊男（北海道大学文学研究科）

亀田達也（北海道大学文学研究科）

日時 2010年9月12日（日）

16:00～16:50

場所 一橋大学東キャンパス

マーキュリータワー

7階会議室

現在、文部科学省特定領域研究「実験社会科学－実験が切り開く21世紀の社会科学－」は、折り返し地点を迎えたところである。本パネルディスカッションでは、研究代表者である西條辰義教授が、前半における各班活動内容や研究教育実績等について報告し、後半に向け残された課題と今後の方向性について、フロアを含め活発な議論を行った。当拠点からは、亀田達也リーダー、山岸俊男教授が出席し、心理学・経済学・政治学など社会科学の諸分野の融合の成果と問題点について述べ、忌憚ない意見交換を行った。

実験社会科学 サマースクール 2010

主催／信州大学経済学部、玉川大学脳科学研究所、文部科学省特定領域研究

「実験社会科学－実験が切り開く21世紀の社会科学－」

協賛／トビー・テクノロジー・ジャパン株式会社

日時 2010年9月13日（月）～15日（水）：講義（信州大学）

9月16日（木）～17日（金）：実習（玉川大学）

場所 信州大学 松本キャンパス経済学部新棟6F 会議室（講義）
玉川大学 脳科学研究センター（実習）

文部科学省特定領域研究「実験社会科学－実験が切り開く21世紀の社会科学－」主催のサマースクールは、竹内幹氏（一橋大学）による、社会科学における実験手法を使った研究を概観する導入講義に始まり、下條信輔（カリフォルニア工科大）、高橋英彦（京都大学）、春野雅彦（玉川大学）、大井学（金沢大学）の諸先生方を講師に迎え、人文・社会科学系研究者のための神経科学入門講座を、またそれに引き続き、西條辰義（大阪大学）、竹村和久（早稲田大学）、船木由喜彦（早稲田大学）の諸先生方による人文・社会科学系における実験系研究の最先端の講義という盛沢山の内容を、3日間の短期集中で行った。また今年は、信州大学におけるレクチャープログラム内で、トビー・テクノロジー・ジャパン株式会社協賛でEye-tracking機器のデモンストレーションを実施したのに加え、玉川大学に場所を移して、9月16～17日の2日間でfMRI実習を含む本格的な実践プログラムを実施した。

グローバルCOE

心の社会性に関する教育研究拠点

The Center for the Sociability of Mind